

石川功一の水彩・油彩展

和歌に詠まれた草花たち



見わたせば 向ひの野辺の なでしこの
散らまく惜しも 雨な降りそね

万葉集 巻第十・一九七〇番歌 作者未詳

石川功一《エゾカワラナデシコ(蝦夷河原撫子)》1986年 水彩スケッチ
Kōichi Ishikawa 《Ezokawaranadeshiko》1986 Watercolor painting

小さな美術館 軽井沢草花館

2020 6/13(土) - 11/23(月)

開館時間 10:00 ~ 17:00 入館料 500 円 (中学生以上)、小学生以下無料

休館日 右記載(臨時対応) 場所 裏面の詳細地図を参照

<https://kusabana.net> Tel.0267-42-0716

新型コロナウイルスの影響による臨時対応

当館では「感染拡大予防ガイドライン」に沿った必要な対策をとりながら、当面の間、下記の開館日とさせていただきます。尚、感染状況の変化によって、対応の緩和や緊張を行ってまいりますので、来館予定の方は事前にホームページ等で開館日を確認いただきますよう、お願い申し上げます。

開館日 金、土、日、月曜日(及び祝日)

休館日 火、水、木曜日 ※6月13日よりしばらくの期間の臨時対応



石川功一の水彩・油彩展

和歌に詠まれた草花たち

Kōichi Ishikawa water & oil painting exhibition. Plants written in waka

画家・石川功一が描いた軽井沢自生の草花図(水彩・油彩)の中から和歌に詠まれた植物を紹介する企画展です。

スミレ、アカネ、フジ、ワスレグサ、ハギ、ナデシコ、クズ、カタクリなどを含む40数点の作品を和歌と共に紹介します。

和歌は、5世紀から8世紀にかけて詠まれたと言われる、わが国最古の歌集「万葉集」の歌を中心に選んでいます。古き日本の歌と共に、その時代に咲いていた草花たちの作品をお楽しみ下さい。



タチツボスミレ 1986 水彩スケッチ

春の野に すみれ摘みにと 来し我れぞ
野をなつかしみ 一夜寝にける
万葉集 巻第八・二四二四番歌 山部赤人



忘れ草 我が紐につく 香具山の
故りにし里を 忘れむがため
万葉集 巻第三・三三四番歌 大伴旅人

ヤブカンゾウ(わすれぐさ) 1990 カンバス油彩 12号



ヤマハギ 1990 水彩スケッチ

我がやどの 萩の下葉は 秋風も
いまだ吹かねば かくそ黄変てる
万葉集 巻第八・二六二八番歌 大伴家持

小さな美術館 軽井沢草花館(かるいざわ くさばなかん)

画家・石川功一が描き続けた軽井沢自生の草花図(水彩スケッチと油彩画)を展示する小さな個人美術館。

石川功一の草花油彩画百数十点と水彩スケッチ(約950種、3,000余枚)をはじめ、人物デッサン、人物、風景画を所蔵し、草花図を中心とした様々な企画展を開催している。

軽井沢に自生する草花を愛した石川功一の経歴と活動

1937年(昭和12年)三重県伊賀市阿保(旧・名賀郡青山町)で開業医の二男として出生。20才の時に大志をいだき東京に出奔、マンガ家となる。その後、画家への道をめざしデッサンに明け暮れる。30才の頃より描きはじめたドローイング「人間戯画」が銀座の画廊に認められ、援助を受けることになる。以降、人物画を中心に画家としての活動を続ける。

1981年(44才)、個展のため軽井沢を訪れたことが縁で草花と出会い、草花画が本来目指すべき道だと悟り、草花のスケッチと油彩画制作に新しい境地を開いた。草花本来の姿を描き取るため、スケッチは自ら軽井沢の野山を駆け巡り、自生している状態を描き続けた。油彩画は背景の色を何層にも重ねる独自の画法で、日本画のような繊細な画風を生み出した。

近年開発の中で自生地が狭められ、消えゆく草花が増える中、
「軽井沢の自然に息づく
草花の永遠の命を残す」
をテーマに草花画の制作を続けた。

2007年7月永眠(満70才)

